

# オリエンテーション・キャンプが 新入生の大学適応に及ぼす効果

金城 亮・黒川 正流

広島大学総合科学部人間行動研究講座  
(1991年10月31日受理)

## The effect of the "Orientation Camp" on freshmen's adjustments to their college-lives

Akira KINJO and Masaru KUROKAWA

### Abstract

This study investigated the effects of the "Orientation Camp" upon the freshmen's adjustments and satisfactions to their new college-lives. Two-hundred and sixty-seven freshmen who participated in the camp and 148 freshmen who didn't participate in it were administered questionnaires two or three times. Their scores of adjustment and satisfaction to their new lives were examined by  $2 \times 2 \times 2$  (participant/not participant of the camp, the choice order of Hiroshima University, the first/not the first and before/after the Camp) ANOVA. The scores of adjustment and satisfaction after the camp decreased as compared with before the camp. However, the scores of adjustment of the freshmen who participated the camp and whose choices were the first were higher than the scores of the other groups both before and after the camp. The scores of satisfaction of the freshmen who didn't participate and whose choices were the first decreased markedly. The results suggest that the Orientation Camp was effective only for the freshmen who willingly entered Hiroshima University to adjust to their new college-lives but not for those who reluctantly entered.

### 問 題

広島大学では、新入生を対象としたオリエンテーション行事の一環としてオリエンテーション・キャンプ（以下、本論文ではオリキャンと表記する）を実施している。この行事は「新入生、上級生、教職員が瀬戸内海の大自然の中で寝食を共にし、共に語り、共に楽しみや苦しみを分かち合うことにより、新入生相互また上級生との親睦、教職員との信頼関係が生じ、そこに貴重な人間関係が育成される。また、同じ大学に学ぶ者としての強い連帯感が醸成されていき、無意識のうちに大学生活に馴染んでいく（瀬川，1981）」ことをねらいとした行事である。1991年度は新入生参加希望者とフェローと呼ばれる学部2年生中心の班長、さらに体育会を中心とする運営役員及び教職員をあわせて2,401名が、1泊2日のキャンプ生活を体験した。このオリキャンが最初に行われたのは1973年度であり、1991年度までに19回を数えている。

表 a に1991年度のオリキャンの日程を示す。初日の朝、参加者達は班毎にそれぞれ趣向を凝らしたコスチュームを身にまとい、チャーターした4隻の船に分乗して宮島包ヶ浦に渡った。学長を村長とする開村式の後、テント設営・飯合炊餐等を済ませ、全員が参加してのキャンプ

ファイヤーが催された。その後のミニ・ファイヤーと呼ばれる行事では、班毎にテントサイトで小さな焚火を囲み、教官を交えて夜の更けるまで語り合った。翌日の午前中は、いくつかのフェロー・グループが企画したレクリエーションに班単位で参加して楽しむ野外活動があり、昼食の後、テントの撤収、施設の清掃を済ませ閉村式をむかえた。以上がオリキャンの主な日程である。

表 a 1991年度オリキャン日程

時 日	4:00	6:00	8:00	10:00	12:00	14:00	16:00	18:00	20:00	22:00		
27 日 (土)			・出 ・広 ・棧 ・島 ・橋 ・集 ・合 ・発	・包 ・ケ ・浦 ・着	・開 ・村 ・式	・昼 ・食 ・テ ・ン ・ト ・設 ・営	・グ ・ル ・オ ・リ ・エ ・ン ・テ ・ン	・自 ・由 ・時 ・間	・夕 ・食 ・準 ・備 ・食	・キ ・ャ ・ン ・プ ・フ ・ァ ・ィ ・ヤ ・ー	・ミ ・ニ ・フ ・ァ ・ィ ・ヤ ・ー	・就 ・寝 ・準 ・備 ・就 ・寝
28 日 (日)		・起 ・床	・朝 ・準 ・食 ・備	・朝 ・食	・野 ・外 ・活 ・動 ・企 ・画	・昼 ・食 ・テ ・ン ・ト ・撤 ・去	・グ ・リ ・ン ・キ ・ャ ・ン ・ク ・リ ・ン	・閉 ・村 ・式	・出 ・発	・解 ・散 ・廣 ・島 ・大 ・学 ・に ・着		

「平成3年度オリエンテーション・キャンプ実施要項及び申込書」より転記

ところで中村 (1985) は、米国の National Association of Education の調査結果を引用し、新入学生オリエンテーションを成功させる要因として、次の8項目を挙げている。1) 教官と学生とが直接個人的に接触すること。2) 大学の全教職員の理解と協力があること。3) 学生に対する資料が十分に備わっていること。4) 学生の適当なグループわけがなされていること。5) 訓練された上級生を参加させること。6) 課外活動グループの協力があること。7) 新入学生の生活を妨害する勢力がないこと。8) 組織的に行われる助言教官制度があること。

これらの条件を広島大学のオリエンテーションキャンプに当てはめて考えると、上記のうち、4), 5), 6) については十分に、1), 2), 7), 8) についてはある程度条件が整っているが、3) に関して、なかでも新入生の抱える心理的諸問題について体系的に調査した資料は依然整わない現状といえよう。

入学初年度における学生の「やる気」の変化パターンを調査した岩崎・石桁 (1986) は、複数の大学で入学直後の4～5月や前期定期試験後にやる気の尻下がり型低下傾向が示されることを明かにし、入学直後・定期試験後の指導の工夫が必要であることを強調している。さらに加澤 (1986) は近年の大学生の不応症候群として、1) 度重なる留年、2) 中途退学、3) 様々な精神神経系の疾患、4) 勉学意欲の喪失による休学、5) 自殺、をあげ、新入学生オリエンテーションを含む SPS (Student Personnel Services) 活動の充実の必要性を論じている。

また琉球大学の新入生を対象に、大学への適応状況について調査した中村・新里・鳥袋・井村 (1987) の研究では、学生生活に不安を感じている学生が約半数 (43.8%) におよび、また16%の学生が入学後の目標を喪失していることを報告している。さらに第1志望入学者と第2志望入学者の比較では、第1志望入学者で相対的に大学適応良好を示す回答が多く、一方、第2志望入学者ではヒステリー・不安・抑うつ・心気症項目への回答率が高いことが示されている。大学生活への適応を考える際に、第1志望入学者かそれ以外の不本意入学者であるかという点は、考慮しなければならない問題である。

本研究はグループ・ダイナミックスの立場から、オリキャンが新入生の大学適応に及ぼす効果を検討する目的で行われた。オリキャンが広大学生としての連帯感を醸成し、教職員との信頼関係を形成する上で有効な手段であるならば、結果としてオリキャンに参加した新入生は参加しなかった新入生に比べて学生生活への適応が促進されると考えられる。また、新入生自身の広島大学志望順位も、学生生活への適応に影響を与えるであろう。すなわち、第1志望で入学した学生ほど学生生活への適応により積極的であると考えられる。そこで本研究では、新入生の学生生活への適応の程度をオリキャンの前後で測定し、時系列的分析を行った。また適応に関連する変数であると考えられるオリキャン後の獲得友人数、孤独感についても検討した。さらに、オリキャン参加者を対象にした調査では、グループ・リーダー（フェロー）の班運営のあり方とオリキャンの効果についても検討した。

本研究では、次の仮説が検討された。

- 仮説1-1) オリキャン参加者は不参加者に比べて、オリキャン後の学生生活適応度・満足度が高いであろう。
- 仮説1-2) 第1志望入学者は不本意入学者に比べて、学生生活適応度・満足度が高いであろう。
- 仮説2) オリキャン不参加者は参加者に比べて、入学後3ヶ月目の獲得友人数が少なく、孤独感が高いであろう。
- 仮説3) オリキャンに参加した者でも、フェローの集団運営の仕方によって適応への効果が異なるであろう。

## 方 法

### A. 調査対象

総合科学部（以下、総科と表記する）・経済学部（経済）・工学部VI類（工VI）・医学部（医学）の4学部の新入生、また新入生と同学部のフェロー、およびオリキャンに参加した教職員。新入生を対象とした調査を2ないし3回、フェローを対象とした調査を2回、教職員対象の調査を1回行った（各回の人数は表A-1、A-2、A-3を参照）。なお、医学部学生については、オリキャン直後のデータのみであるため、オリキャン参加者・不参加者の比較を行う分析からは除外した。

### B. 調査計画

本調査では、オリキャンの事前・当日・事後に3回調査を行い、それぞれ調査①・調査②・調査③とした。

オリキャンに参加した新入生には、

- 本番1週間前に行われたオリキャンの単位グループの顔合せの場で調査①を実施。
- オリキャン最終日にフェローを通じて調査②の質問紙を配布し後日回収。
- さらに6月下旬の語学の授業時間に調査③を実施した。

これら調査対象者と同じ学部のオリキャン不参加者に、前記(a)とほぼ同時期に語学クラスを利用して調査①を実施。また前記(c)と一緒に調査③を実施した。

フェローには前記(a)、(b)と同時期に新入生と一緒に調査①および調査②を実施した。教官に対する質問紙は(b)と同時期に配布、後日回収した。

### C. 質問紙の構成

新入生を対象とした調査項目を表B-1に、フェロー・教官に対する調査項目を表B-2に示す。調査は無記名で行ったが、各回の結果を照合するという理由で学生番号の記入を求めた。

表 A-1 新入生回答者の構成

		総科	経済	工Ⅳ	医学	計
<u>調査①</u>						
参加	男	63	79	88	—	230
	女	70	15	8	—	93
	不明	0	0	1	—	1
	計	133	94	97	—	324
不参加	男	31	66	51	—	148
	女	11	14	8	—	33
	計	42	80	59	—	181
<hr/>						
<u>調査②</u>						
参加	男	65	52	45	47	209
	女	71	12	8	30	121
	計	136	64	53	77	330
不参加	男	—	—	—	—	—
	女	—	—	—	—	—
	計	—	—	—	—	—
<hr/>						
<u>調査③</u>						
参加	男	60	66	82	—	208
	女	69	18	11	—	98
	計	129	84	93	—	306
不参加	男	32	62	44	—	138
	女	13	14	5	—	32
	計	45	76	49	—	170

表 A-2 フェロー回答者の構成

		総科	経済	工Ⅳ	医学	計
<u>調査①</u>						
男		5	7	7	—	19
女		6	1	1	—	8
計		11	8	8	—	27
<hr/>						
<u>調査②</u>						
男		6	9	4	6	25
女		6	0	1	1	8
計		12	9	5	7	33

表 A-3 教官回答者の構成

	総科	法学	経済	工Ⅳ	医学	計
20代	0	1	2	4	0	7
30代	8	4	5	6	3	26
40代	6	1	1	5	2	15
50～	2	2	1	4	1	10
不明	0	1	0	0	0	1
計	16	9	9	19	6	59

なお本論文では、オリキャン参加者・不参加者の適応の様態を比較する目的に関連した項目に限定して分析を行った。

新入生対象の質問紙のフェイス項目以外の主要項目は以下の通り。

調査① (a)広島大学の入学志望順位と受験理由。(b)学生生活適応度測定項目：山口・岩野・原野(1990)の『精神健康度テスト』より「私にはやりたいことや熱中できるものがない」「努力すれば自分の将来は開けると思う」など4項目、さらに、上地・中丸・小柳(1982)の『学生生活適応度診断テスト』より「転科・転学部ができれば、他の学部・学科に移りたいと思う」「心のふれあう学友に恵まれない」など、学生生活に関わる項目を7項目抽出し、計11項目からなる尺度を構成した。また実施に際しては記述を若干変更し、反転項目(例：心の触

表 B-1 調査項目対照表 (新入生対象)

調査①	調査①'	調査②	調査③	調査③'
<p>&lt;フェイス項目&gt;                      学生番号                      性別                        高校卒業年                      高校所在地                      宿所                      サークル活動                        加入の有無                        所属                        受験決意時期                      広大志望順位                      広大受験理由                      学生生活適応度                      学生生活満足度                      広大イメージ                      準拠集団</p>	<p>学生番号                      性別                        高校卒業年                      高校所在地                      宿所                      サークル活動                        加入の有無                        所属                        受験決意時期                      広大志望順位                      広大受験理由                      学生生活適応度                      学生生活満足度                      広大イメージ                      準拠集団</p>	<p>学生番号                      性別                      オリキャン班名</p>	<p>学生番号                      性別                          サークル活動                        加入の有無                        所属                        関係満足度                        入学後友人関係                        友人数                        関係満足度                        学生生活適応度                      学生生活満足度                        準拠集団                      孤独感尺度                      一般教育科目評価                      学生生活の情報源                      学部・学科の知識                      学部帰属意識</p>	<p>学生番号                      性別                          サークル活動                        加入の有無                        所属                        関係満足度                        入学後友人関係                        友人数                        関係満足度                        学生生活適応度                      学生生活満足度                        準拠集団                      孤独感尺度                      一般教育科目評価                      学生生活の情報源                      学部・学科の知識                      学部帰属意識</p>
<p>&lt;オリキャン関連&gt;                      オリキャン参加理由                      班内の知人数                      オリキャンへの期待                      フェロのリーダーシップ</p>	<p>オリキャン不参加理由</p>	<p>フェロのリーダーシップ                      準備期間の班活動                        班集合回数                        班活動関与                        班活動満足                      当日の班活動                        フェロ・教官交流                        班のまとめり                        班活動満足度                      班のモラル                      オリキャン企画評価                        キャンプ・ファイヤー                        ミニ・ファイヤー                        野外活動企画                        印象的企画                      オリキャンの収穫                      フェロ希望                      今後のあり方                        存続-廃止                        改善案                        廃止希望理由                      オリキャン代替案</p>	<p>フェロのリーダーシップ                                      オリキャンの収穫</p>	

調査①	調査①'	調査②	調査③	調査③'
			オリキャン関係友人数 オリキャン勤めるか	裏オリキャンの有無 不参加による影響

表 B-2 調査項目対照表 (フェロー・教官対象)

調査① (フェロー)	調査② (フェロー)	調査②' (教官)
<フェイス項目> 学生番号 性別 オリキャン班名 高校卒業年 高校所在地 学生生活適応度 学生生活満足度 広大イメージ 準拠集団	学生番号 性別 オリキャン班名	所属学部 年齢 学生との接触機会
<オリキャン関連> フェローになった理由 班指導上の留意点 前フェローのリーダーシップ 去年のオリキャン印象	リーダーシップ自己評価 準備期間の班活動 班集合回数 班活動関与 班活動満足 当日の班活動 フェロー・教官交流 班のまとめり 班活動満足度 オリキャン企画評価 キャンプ・ファイヤー ミニ・ファイヤー 野外活動企画 印象的企画 フェローの仕事 フェローの役割 フェロー教育 日常生活への影響 やりがい 今後のあり方 存続-廃止 改善案 廃止希望理由 オリキャン代替案	参加回数 参加理由 参加動機 班活動への参加 参加新入生の利点 班活動評価 フェローの熱意 フェローの指導 (技術) フェローの指導 (人間関係) チームワーク 班別行動 班の学生にとけ込めたか 最も印象的な行事 キャンプ・ファイヤー評価 参加の有無 感想 疎外感 疎外感の原因 今後の参加の意志 今後の目的・意義 今後のあり方 存続-廃止 改善案 廃止希望理由

れ合う学友に恵まれそうだ) を設けた。回答は項目ごとに「はい」「いいえ」の2件法で求め、その合計点を学生生活適応度得点とした。(c)学生生活満足度項目：「新しい生活に関して」「広大学生という身分に関して」「広島大学に対して」の3項目について「1. 非常に不満」から「7. 非常に満足」までの7件法で回答させ、その合計点を学生生活満足度得点とした。(c)オリキャン関連項目：参加者には参加動機を問う項目と、フェローに対する印象評価をPM形式のリーダーシップ項目を用いて評定させた。不参加者には不参加の理由を回答させた。

調査② (a)班活動における相互作用の程度, (b)班活動満足度, (c)班のモラルなどの項目と, (d)フェローのリーダーシップ評定項目からなる。オリキャン参加者にのみ実施した。

調査③ (a)入学後知り合った同性・異性の友人数。(b)学生生活満足度測定項目, (c)学生生活適応度測定項目。適応度項目は調査①の項目の記述のうち期待を問う形式の項目を現状を問う形式に変更した。(d)孤独感測定項目。改訂版 UCLA 孤独感尺度邦訳版(工藤・西川, 1983)より「私には頼りにできる人が誰もいない」「私は他の人たちから孤立している」等8項目を抽出し、一部記述を修正して「1. 全く感じない」から「4. しばしば感じる」の4件法で回答させた。8項目の合計点を孤独感得点とした。

## 結 果

### I. オリキャン参加者と不参加者の特性

#### (1) 広島大学の志望順位と受験理由

新入生はどのような経緯を経て広島大学受験を決意し、また大学に対してどのようなイメージを抱いているのであろうか。調査①では広島大学の志望順位と受験理由、大学に対するイメージ等を調査し、オリキャン参加者と不参加者について比較した。

広島大学の志望順位に関しては、回答者全体の半数(50.1%)が広大を第1志望に選んでいるが、オリキャン参加者群が不参加者群に比べて広大第1志望者の占める割合が有意に大きく

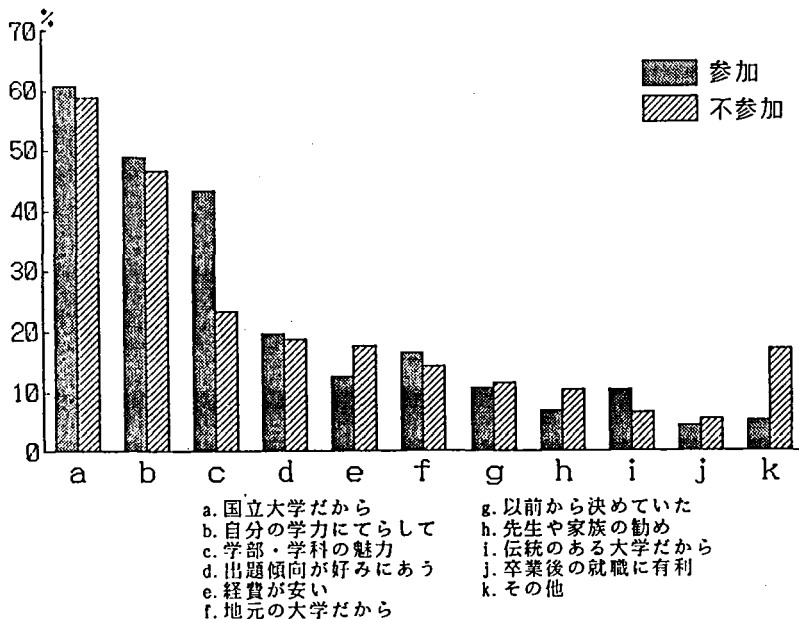


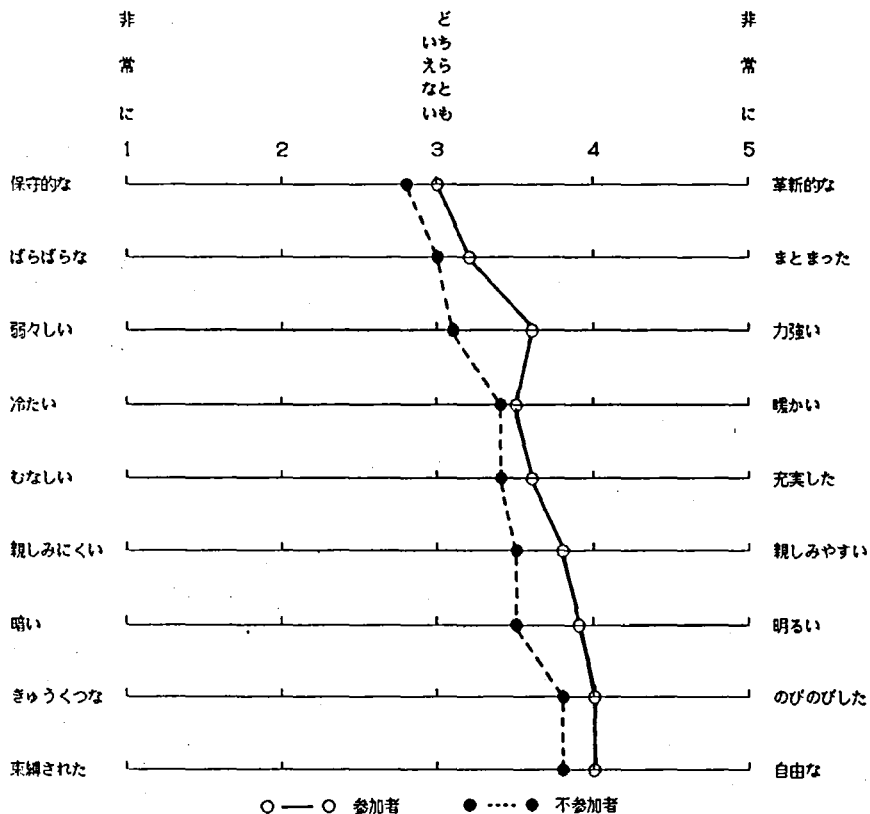
図 I-1 広島大学受験理由

(参加者：第1志望176名，その他148名；不参加者：第1志望77名，その他104名； $\chi^2=6.45$ ， $df=1$ ， $p<.05$ )，参加者では54.3%が第1志望なのに対し，不参加者では42.5%であった。

広大受験理由についての結果を図I-1に示す。広大の受験理由としてはオリキャン参加者，不参加者ともに「国立大学であるから」という理由が最も多く，ついで「学力にてらして適当だから」という回答の選択率が高い。オリキャン参加者と不参加者で選択率の異なる項目は「学部・学科の魅力」で，参加者では43.2%が受験理由として選択しているのに対し，不参加者では23.3%の選択率である。さらに所属学部によっても同項目の選択率が異なっている。総科では，学部・学科の魅力を挙げた学生がオリキャン参加者で78.9%，不参加者で61.9%であり，ともに3学部中最も高い選択率を示している。ついで工IVではオリキャン参加者の29.9%，不参加者の20.3%が選択している。経済では学部の魅力を受験理由にあげた学生が参加者6.4%，不参加者5.1%であった。

(2) 大学生生活のイメージ

次に，広大における学生生活イメージをSD法で評定させた結果（図I-2）を示す。いずれの項目も5段階評定で平均得点が3点以上であり，新生はおおむねポジティブなイメージを保持していると考えられる。しかしオリキャン参加者群と不参加者群では，非常に類似したプロフィールでありながら，後者は全項目がネガティブ方向にずれている。つまりオリキャン不参加者は，参加者ほどには広大に対して好意的な評価をしていない。



図I-2 オリキャン参加・不参加者の大学生生活イメージ



## (3) オリキャン参加理由・不参加理由

オリキャンへの参加理由と不参加理由についてまとめたのが表I-1とI-2である。オリキャン参加理由として最も選択率の高い項目は「先輩等から楽しいと聞かされていた」(34.3%)であり、ついで「ただなんとなく」(20.7%)と「いろいろ教えてもらえそうだから」(20.1%)が同程度に高い選択率となっている。不参加理由としては「申し込みが遅れた」(64.1%)が最も高い選択率を示している。

表I-1 オリキャン参加理由  
(n=324)

先輩等から楽しいと聞かされていた	34.3
ただなんとなく	20.7
いろいろ教えてもらえそうだから	20.1
参加しなければいけないと思った	11.1
参加するのが当然だから	4.9
その他	5.9
無効回答	3.1
	(%)

表I-2 オリキャン不参加理由  
(n=181)

申し込みが遅れたから	64.1
他に予定があったから	7.7
団体行動が嫌だったから	5.0
強制されるのが嫌だから	4.4
野外活動が嫌いだから	3.9
先輩や友人が否定的な話をしていた	1.7
その他	9.4
無効回答	3.9
	(%)

## (4) オリキャン参加・不参加の規定因

オリキャンへの参加・不参加に影響を与える要因を探索する目的で、オリキャン参加・不参加を従属変量とし、以下にあげる5変量を独立変量として数量化Ⅱ類の分析を行った。①出身高校の所在(1:市内, 2:市以外の県内, 3:県外), ②サークル加入状況(1:加入, 2:非加入, 3:迷っている), ③志望順位(1:第1志望, 2:その他), ④大学生活のイメージ(1:ネガティブ, 2:ニュートラル, 3:ポジティブ), ⑤準拠集団(1:入学前からの友人(広大学生), 2:入学後知り合った学部・学科の仲間, 3:サークル・クラブの仲間, 4:広大学生以外の学生, 5:家族・親戚, 6:一般社会人, 7:その他)。なお、④の下位項目の分類では、イメージ測定項目の合計点で下位31.8%の低得点者をネガティブ群, 中位40.4%をニュートラル群, 上位27.8%の高得点者をポジティブ群とした。また、準拠集団については「自分がこの仲間の一員だと感じ、影響を多く受けているグループ」として1つ選択させた。

数量化Ⅱ類による分析の結果を表I-3に示す。全体の相関比は.113と低い値であるが、各独立変数のカテゴリー・ウエイトをみると、変量①では、特に市内出身者であることがオリキャン参加の方向に作用している。変量②では、サークル加入を迷っている群に属することが参加の方向に作用しているが、調査時期がサークル勧誘時期と重なっており、調査対象者505名のうち205名(40.6%)はこの時期まだ加入するサークルを選択中の学生である。また、すでにサークル非加入を決めている場合には、オリキャン不参加の方向に強く作用している。変量③では、第1志望であることは参加方向に、不本意入学であることは不参加方向に作用している。変量④では、大学生活のイメージがニュートラルあるいはポジティブな場合には参加方向に、ネガティブな場合には不参加方向に作用している。変量⑤では、準拠集団として選択肢1) 2) すなわち広大学生を選択した者は参加する傾向があり、それ以外の選択肢を選択した者は参加しない傾向があることが示されている。

表 I-3 オリキャン参加・不参加決定に関する数量化Ⅱ類分析

相関比=.113	標本数 (n=403)	category weight	range	偏相関係数
①出身高校			12.92	.09
市内	50	11.06		
県内	26	2.18		
県外	327	-1.86		
②サークル			30.77	.18
加入	192	-1.63		
非加入	41	-23.30		
未定	170	7.47		
③志望順位			11.84	.12
第1志望	206	5.79		
その他	197	-6.05		
④大学生生活イメージ			21.23	.17
negative	130	-11.82		
neutral	164	3.12		
positive	109	9.41		
⑤準拠集団			20.63	.15
入学前友人	106	5.74		
入学後友人	164	4.79		
サークル仲間	29	-12.50		
他大学生	63	-7.62		
家族・親戚	26	-14.89		
社会人	5	-4.20		
その他	10	-14.28		

## Ⅱ. オリキャン参加の効果

### (1) 学生生活適応度

学生生活への適応に関する11項目の合計得点を算出し、オリキャン参加・不参加と広大な志望順位および調査時期について比較した結果を、表 II-1 に示す。オリキャン参加（有・無）×志望順位（第1志望・その他）×調査時期（調査①・③）の被験者間2要因、被験者内1要因の3要因分散分析を行った結果、オリキャン参加の主効果（ $F=4.36$ ,  $df=1/352$ ,  $p<.05$ : 参加

表 II-1 学生生活適応度得点の変化

志望順位	参加		不参加		分散分析結果
	調査①	調査③	調査①	調査③	
第1希望	20.46 (1.39)	19.32 (1.62)	19.71 (1.82)	18.67 (1.87)	参加(A): 4.36* (参>不) 志望(B): 5.96** (1>他) A×B: 4.23**
その他	19.73 (1.63)	18.53 (1.93)	19.52 (1.93)	18.73 (1.79)	調査(C): 118.13** (①>③) A×C: n. s. B×C: n. s. A×B×C: n. s.
	134		52		
	99		71		

上段：平均値，中段：SD，下段：人数

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$

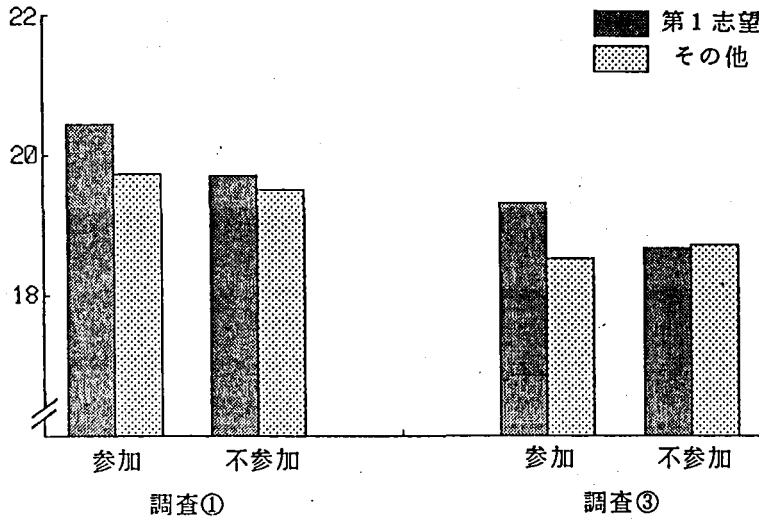


図 II-1 学生生活への適応度

>不参加), 志望順位の主効果 ( $F=5.96, df=1/352, p<.05$ :第1志望>その他), 調査時期の主効果 ( $F=118.13, df=1/352, p<.01$ : 調査①>調査③) がそれぞれ有意であった。またオリキャン参加×志望順位の1次の交互作用が有意であった ( $F=4.22, df=1/352, p<.05$ )。すなわち, 図 II-1 に示すように入学直後の調査①に比べて, 6月下旬の調査③では適応度得点が全般に低下する傾向にあるが, 第1志望で入学してオリキャンに参加した群では, オリキャンの前後で一貫して他の3群に比べ高い適応度を維持していることが示された。

(2) 学生生活満足度に関する結果:「日常生活」「広大生という身分」「広島大学」の3領域に関する満足度の合計得点を学生生活満足度得点として, その変化をオリキャン前後で比較した結果を表 II-2 に示す。オリキャン参加×志望順位×調査時期の  $2 \times 2 \times 2$  の3要因分散分析を施した結果, 適応度と同様にオリキャン参加 ( $F=6.28, df=1/411, p<.05$ ; 参加>不参加), 志望順位 ( $F=44.53, df=1/411, p<.01$ ; 第1志望>その他), 調査時期 ( $F=49.95, df=1/411, p<.01$ ; 調査①>調査③) のそれぞれの主効果が有意であった。さらに, オリキャン参加×志望順位×調査時期の2次の交互作用 ( $F=4.94, df=1/411, p<.05$ ) が有意であった。図 II-2 に示すように, 満足度得点に関しても入学直後に比べて6月下旬の調査では全般的に

表 II-2 学生生活満足度得点の変化

志望順位	参加		不参加		分散分析結果
	調査①	調査③	調査①	調査③	
第1志望	15.80 (2.66)	14.72 (3.90)	15.50 (2.95)	13.47 (3.49)	参加(A): 6.28* (参>不) 志望(B): 44.53** (1>他) A×B: n. s.
	152		64		
その他	13.96 (2.71)	12.65 (3.40)	12.99 (3.12)	12.33 (3.32)	調査(C): 49.95** (①>③) A×C: n. s. B×C: n. s. A×B×C: 4.94*
	115		84		

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$

上段: 平均値, 中段: SD, 下段: 人数

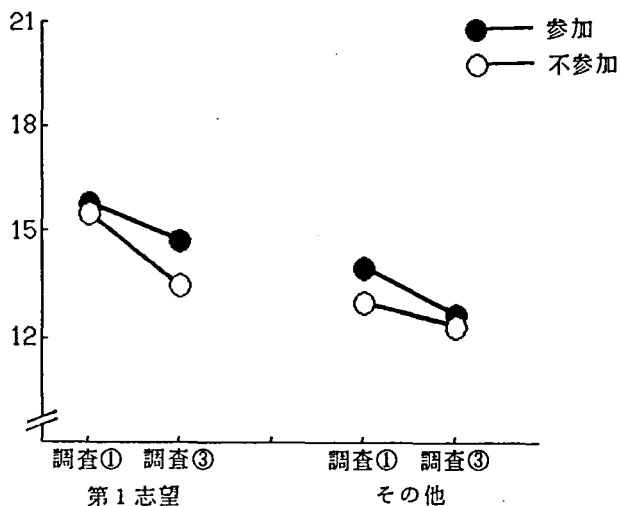


図 II-2 学生生活の満足度

満足度が低下する傾向がみられる。なかでも第1志望で入学した学生については、調査①で見るとオリキャン不参加群もオリキャン参加群と同様の高い満足度を示しているが、オリキャン後の調査③では、第1志望・不参加者群の満足度の低下が他の3群に比べて特に顕著である。

(3) 友人数

大学入学後に知り合った友人の数について、調査③の結果をもとに同性の友人は20名、異性の友人は10名を基準として、オリキャン参加者群と不参加者群をそれぞれ友人少数群とその他の2群に分けた(表II-3)。友人の性別ごとに友人数(少数・その他)×オリキャン参加(参加・不参加)の $\chi^2$ 検定を行った結果、同性の友人数( $\chi^2=26.57, df=1, p<.01$ )と異性の友人数( $\chi^2=6.70, df=1, p<.01$ )のいずれも、オリキャン不参加者群が参加者群に比べ獲得した友人数の少ない者の割合が有意に高い傾向が示された。

表 II-3 オリキャン参加と友人数 (%)

	友人数	オリキャン		検定
		参加	不参加	
同性の友人	少数(n<20)	15.7	36.5	$\chi^2=26.57$ $p<.01$
	その他	84.3	63.5	
異性の友人	少数(n<10)	21.6	32.4	$\chi^2=6.70$ $p<.01$
	その他	78.4	67.6	
計(N)		306	170	

(4) 孤独感

調査③によって入学3カ月後の時点での孤独感を測定した(図II-3)。孤独感得点に関して、オリキャン参加(参加・不参加)×志望順位(第1志望・その他)の2要因分散分析を行った結果、オリキャン参加の主効果が有意であり( $F=7.30, df=1/404, p<.01$ ; 不参加>参加)、オリキャン参加者群に比べ、不参加者群では孤独感が有意に高いことが示された。

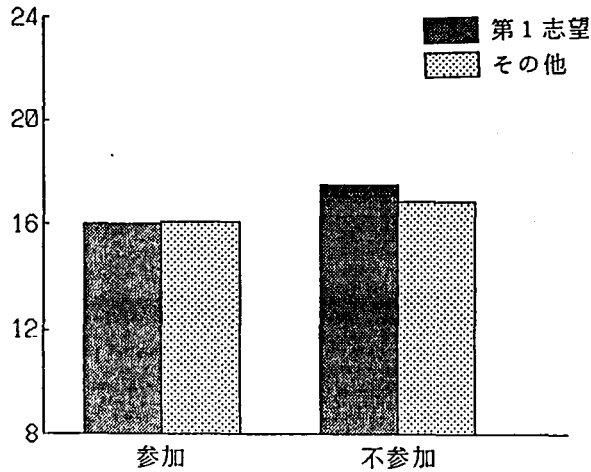
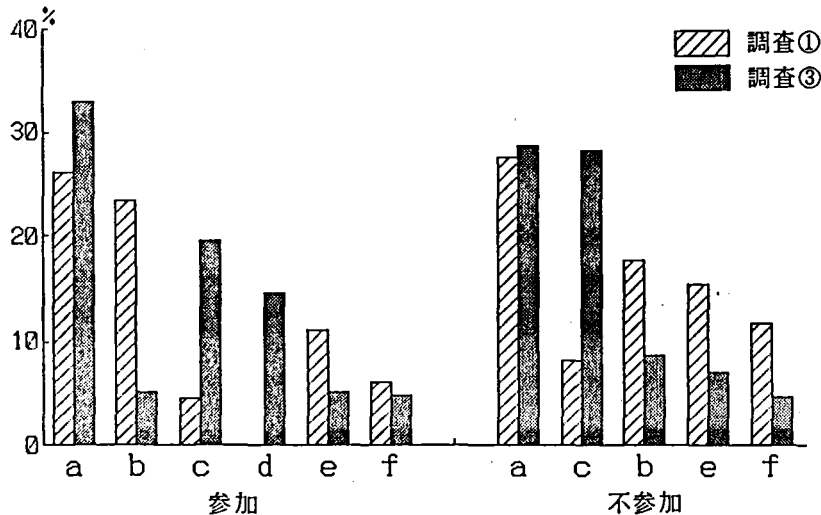


図 II-3 孤独感

(5) 準拠集団

準拠集団について、オリキャン前後で選択させた結果を図 II-4 に示す。調査①では高い割合を示していた「入学前からの友人」の割合が調査③では減少し、かわって「入学後の友人」「サークルの仲間」の割合が増加している。また、オリキャン参加者の14.7%が準拠集団として「オリキャンの班の仲間」を選択している。これに対し、オリキャン不参加者では、「サークルの仲間」の割合が相対的に増加している。



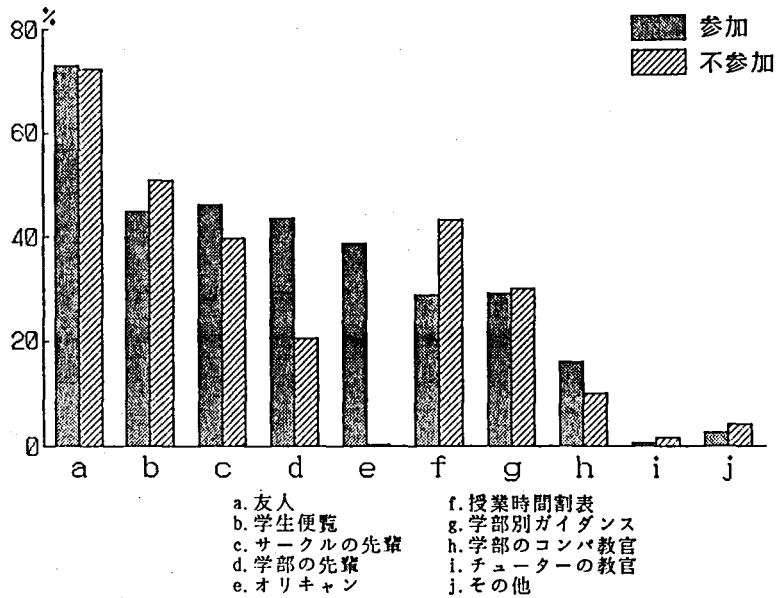
- a. 入学後の同学部・学科の仲間
- b. 入学前からの仲間
- c. サークル・クラブの仲間
- d. オリキャン時の班の仲間
- e. 広大生以外の学生仲間
- f. その他

図 II-4 準拠集団の変化

ここまで、学生生活への適応について、主に対人関係的側面からオリキャンが与える効果を検討してきたが、学生生活への Orientation (方向づけ) についてオリキャンはどのような機能を果たしているのだろうか。

(6) 学生生活の情報源

学生生活を営む上で必要な情報をどこから得ているかについて、いくつかの選択肢からその情報源を選択させた(図II-5)。オリキャン不参加者群では選択率の高いものから友人(72.6%)、学生便覧(51.2%)、授業時間割表(43.5%)、サークルの先輩(39.9%)の順であるのに対し、オリキャン参加者では友人(73.2%)、サークルの先輩(46.1%)、学生便覧(45.1%)、学部の先輩(43.8%)の順となっている。またオリキャン参加者では、選択率の第5位にオリキャン(38.9%)をあげている。友人が重要な情報源であることは、両者とも変わらないが、後者ではオリキャンを通して知り合った学部の先輩(例えばフェロー)や班の友人などからの口コミ情報を活用していることが伺える。



図II-5 大学生生活の情報源

(7) 学部・学科に関する知識

希望学科の教官や研究室、カリキュラム等についての知識は、表II-4に示されたようにオリキャン参加者、不参加者ともに低く、差がみられないが「学部の先輩を何人知っていますか」という問いについては、オリキャン参加者では「10人くらい」「おおぜい」を選択した学生が合わせて57.2%なのに対して、不参加者では27.1%であった。

(8) 学部帰属意識

新入生の学部への帰属意識を検討するために、調査③で所属学部の新入生のチームワークや雰囲気、またその学部を選択してよかったと思うか等6項目について評価を求めた(図II-6)。

図II-6に示された各項目について、オリキャン参加者群と不参加者群の平均値の差を検定した結果、「優秀な人が多い」を除く5項目で参加者が不参加者に比べ、有意に高い評価得点を示していた(この学部を選んでよかった： $t=4.99, df=473, p<.01$ ; 他学部に負けたくない： $t=5.37, df=473, p<.01$ ; 誇りに思う： $t=5.26, df=472, p<.01$ ; 雰囲気が気に入っている： $t=5.46, df=473, p<.01$ ; チームワークがとれている： $t=3.69, df=472, p<.01$ ; すべて両側検定)。なお「優秀な人が多い」でも傾向差が認められ( $t=2.11, df=415, p<.10$ )、オリキャン参加者が学部への高い帰属意識を保持していることが示された。

表 II-4 学部・学科に関する知識

項 目	選択肢	(%)	
		参 加 n=306	不参加 n=170
学部の先輩を何人知っているか	全然知らない	2.9	24.1
	2～3人	39.9	48.8
	10人くらい	40.5	17.1
	おおぜい	16.7	10.0
	無回答	0.0	0.0
希望学科の教官のこと	知らない	84.6	86.5
	ある程度	14.7	12.9
	よく知っている	0.7	0.6
	無回答	0.0	0.0
専門の研究がどの研究室で行われているか	知らない	87.6	88.2
	ある程度	11.1	11.2
	よく知っている	1.0	0.6
	無回答	0.3	0.0
研究室・実験室の場所	知らない	88.9	86.5
	ある程度	10.5	12.4
	よく知っている	0.3	1.2
	無回答	0.3	0.0
学科(コース)のカリキュラム	知らない	66.0	67.1
	ある程度	32.7	32.4
	よく知っている	1.0	0.6
	無回答	0.3	0.0

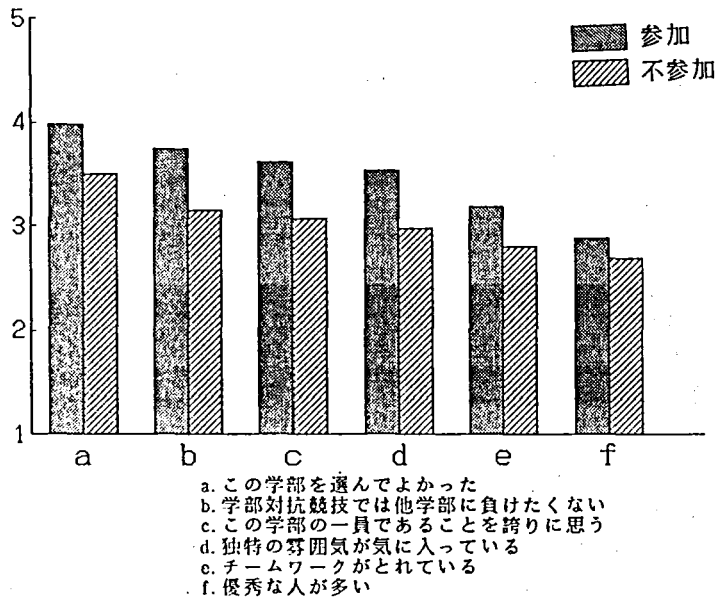
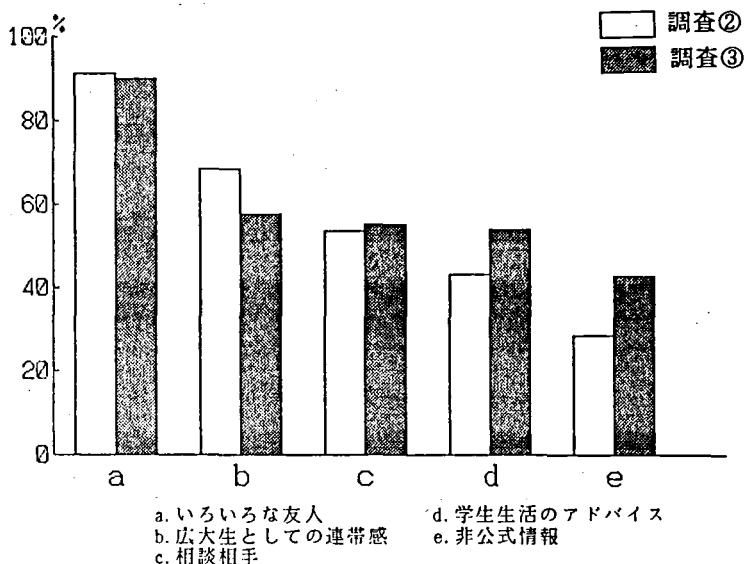


図 II-6 学部帰属意識

### Ⅲ. オリキャン参加による収穫

#### (1) オリキャンの収穫

オリキャンに参加することによって、どのような収穫が得られたかを調査②でたずねた。その結果、図Ⅲ-1に示したようにオリキャン参加者のうち91.5%の学生が「いろいろな友人」を得られたと回答している。また、「広大生としての連帯感」については68.8%、「相談相手」については53.9%の参加者が得られたと答えている。オリキャン後2ヶ月を経た調査③では、「連帯感」は57.8%に減少し、代わって「学生生活のアドバイス」(55.6%)、「非公式な情報」(43.1%)を得られたという回答が増加している。



図Ⅲ-1 オリキャン参加による収穫

では、オリキャンに参加しなかった新生たちは、参加しなかったことで実際に損をしたと考えているのであろうか。調査③で評定を求めた。

#### (2) オリキャン不参加によるデメリット

オリキャン不参加者に、オリキャンに参加しなかったことによる影響をたずねた結果を図Ⅲ-2に示す。図Ⅲ-2の7項目について、「1. 全くそう思わない」から「5. 非常に思う」までの5段階で評定させたところ、「残念に思う」については「非常に」と「ある程度」の2選択肢を合わせて56.5%がそう思うと答えており、「友達づくりの機会を失った」では、2選択肢を合わせて52.3%が、「教官や先輩と知り合う機会を失った」では、同様に49.4%がそう思うと答えている。一方「他人がオリキャンに費やした時間を私は有効に利用できた」では、そう思うと答えた者が2選択肢を合わせて30%に過ぎず、同様に「別に損はしていない」では、そう思うと答えた者が39.4%である。

#### (3) 参加教職員によるオリキャン収穫評価

オリキャンに参加した教職員を対象に、オリキャンに参加した新生がどのような点でプラスになるものを得たと思うかをたずねた結果を図Ⅲ-3に示す。「大学生活に対する不安の低減」「友人関係の拡大」「教官との信頼関係」「広島大学生としての自覚と帰属感」「学問への心



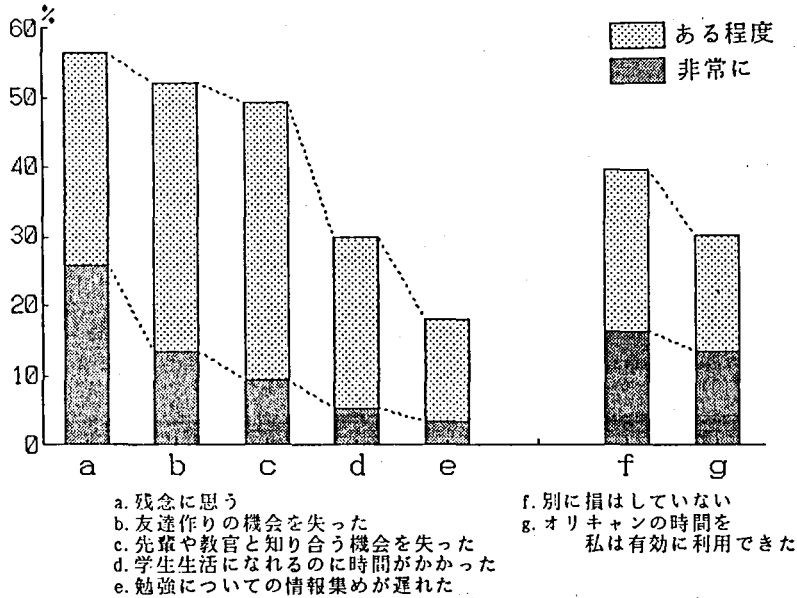


図 III-2 オリキャン不参加による影響

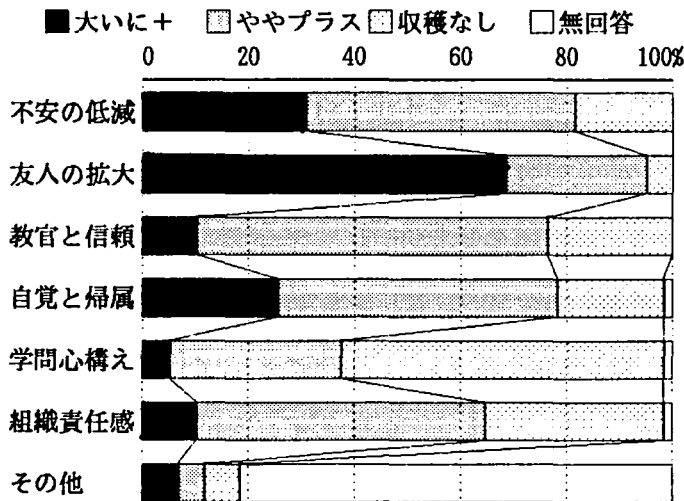


図 III-3 教職員によるオリキャン収穫評価

構え」「組織の一員としての責任感」「その他」の7項目について、「大いにプラス」「ややプラス」「得るものなし」の3段階で評価を求めたところ、90%以上の教職員が「友人関係の拡大」に関して何らかの収穫があったと評価しており、また80%以上が「不安の低減」に関してオリキャンの効用を指摘している。

#### IV. フェローのリーダーシップとオリキャン効果の差異

オリキャンでは、学部毎に10～12名の新入生から成る班が編成され、各班に1名、班活動の管理・運営を行うフェローと呼ばれるリーダーがつく。フェローは通常、班員と同学部の2年生であり、前年度のオリキャンに参加した者が多い。フェローはオリキャン前年の11月に希望

者を募り、希望者が定員枠より多い場合には抽選によって決定される。フェローが決まると、講習会や合宿、リハーサル・キャンプなどが催され、約半年をかけてキャンプ技術など、班のリーダーとしての訓練を受けつつ準備を進めることになる。彼らはどのような理由でフェローを希望し、また、フェローの役割をどのように果たしたのであろうか。

#### (1) フェロー希望理由

調査①において、本調査の対象とした新入生が所属する班のフェロー27名に、フェローを希望した理由をたずねた。その結果「去年味わった感動を自分の手で後輩に伝えたいから」という理由が66.7%で最も選択率が高く、ついで「自分の経験をいかして学生生活のアドバイスをしたいから」が18.5%であった。また「去年のオリキャンが物足りなかった」、「先輩等に言われて仕方なく」の2項目の選択率は0%であった。

#### (2) フェローの役割

フェロー自身は自分の役割をどのように認識していたのであろうか。オリキャン終了直後の調査②でたずねたところ「新入生が早く学生生活の過ごし方になれるように援助する」を選択した者が72.7%、ついで「オリキャンをきっかけに新入生の相談相手になる」が15.2%であった。

#### (3) 日常生活への影響

フェローをしたことによる日常生活への影響をたずねた結果、「アルバイトの時間」(75.8%)「勉強の時間」(48.5%)が犠牲になったと答えた者の割合が高い。また「金銭的に無理をした」と答えた者が63.6%あり、フェローの仕事は時間的にも経済的にもかなりの負担を強いているといえる。一方、フェローのやりがいについてたずねた項目では、87.9%のフェローが「非常にやりがいがあった」と答えている。

ところで、フェローたちは1週間の準備期間、2日間のオリキャン本番を通じて、班員たちにどのようなリーダーシップを発揮したのであろうか。次にオリキャンに参加した新入生にフェローのリーダーシップについて評価させた結果を示す。

#### (4) フェローのリーダーシップ類型

本調査では、PM式リーダーシップ論(三隅, 1978)の観点から、フェローの発揮するリーダーシップに関して、課題指向的な行動(Performance: P行動)と、人間関係維持的な行動(Maintenance: M行動)の2側面について班員に評定させた。具体的には、フェローのP行動評定項目として「班全体をうまく統率していた」「集団行動を乱すと厳しく注意された」「班員に明確な指示を与えてくれた」等8項目、M行動項目として「班員の立場に立って考えてくれた」「班の雰囲気をもとめようと配慮していた」「班員には公平に対応してくれた」等8項目、計16項目で構成した尺度に「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」までの5段階で評定させ、各8項目の合計得点をP得点、M得点とした。なお、調査①では各項目の末尾を「……そうだ」とし、フェローの印象を評定させた。

各調査における総科・経済・工VIの3学部の評価得点平均は、それぞれ調査①(P得点:  $\bar{x}=33.05$ ,  $SD=5.95$ ; M得点:  $\bar{x}=34.47$ ,  $SD=5.29$ )、調査②(P得点:  $\bar{x}=34.52$ ,  $SD=4.93$ ; M得点:  $\bar{x}=37.26$ ,  $SD=3.23$ )、調査③(P得点:  $\bar{x}=30.49$ ,  $SD=5.84$ ; M得点:  $\bar{x}=34.23$ ,  $SD=4.76$ )であった。調査②の平均値を基準にして、上記3学部に医学部を加えた計34名のフェローをPM, P, M, pmの4類型に分類した。その結果、課題指向(P)、人間関係維持(M)の両機能を共に高く評価されたPM型が8名、Pが高く相対的にMの低いP型が5名、その逆のM型が8名、P, Mともに低いpm型が13名であった。

調査①, ②, ③でそれぞれ評定させたリーダーシップ認知得点について、当該項目全てに回

答した187名の得点の相互相関を求めたところ、全ての組合せについて有意な正の相関がみられた(表IV-1)。なかでも調査①のP得点とM得点の相関が最も高く( $r=.78, p<.01$ )。また調査②と調査③のP得点( $r=.61, p<.01$ )、M得点( $r=.58, p<.01$ )の相関が、それぞれ調査①と②の相関(P得点: $r=.38, p<.01$ ; M得点: $r=.30, p<.01$ )および調査①と③の相関(P得点: $r=.31, p<.01$ ; M得点: $r=.32, p<.01$ )に比べて高い正の相関を示している。

表IV-1 各調査のP・M認知得点間の相関

(n=187)	P1	P2	P3	M1	M2
P2	.38				
P3	.31	.61			
M1	.78	.27	.28		
M2	.28	.58	.39	.30	
M3	.22	.33	.51	.32	.58

相関係数 ( $r$ ) は全て1%水準で有意

P1・M1: 調査①のP・M得点

P2・M2: 調査②のP・M得点

P3・M3: 調査③のP・M得点

表IV-2 班活動評価に関するフェローのリーダーシップの効果

項 目	フェローのリーダーシップ類型				分散分析結果
	PM	P	M	pm	
班活動への関与	2.75	2.58	2.64	2.62	n. s.
	(.51)	(.67)	(.61)	(.58)	
	81	52	77	120	
フェローとの親交	2.91	2.71	2.84	2.76	F= 3.06*
	(.28)	(.50)	(.37)	(.50)	PM>P
	81	51	76	119	
教官との交流	2.26	2.10	1.95	1.98	F= 3.21*
	(.67)	(.64)	(.71)	(.78)	PM>pm・M
	81	51	76	120	

上段: 平均値, 中段: SD, 下段: 人数 \*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$

#### (5) フェローのリーダーシップと満足度・モラール

フェローのリーダーシップ4類型間で、表IV-2に示された諸変数について1元配置の分散分析を行った。その結果、相互作用の程度を問う3項目のうち「班活動への関与」を除く2項目でリーダーシップの効果が有意であった(フェローとの親交: $F=3.06, df=3/323, p<.05$ ; 教官との交流: $F=3.21, df=3/324, p<.05$ )。Tukey法による多重比較の結果、フェローとの親交に関してはPM型とP型の差が有意であり、教官との交流ではPM型がpm型、M型に比べて有意に高得点を示している。

次に班活動への満足度についてたずねた4項目(表IV-3)では、いずれもリーダーシップの効果が有意かあるいは傾向差が認められた(準備期間の班活動: $F=5.06, df=3/326, p<.01$ ; コスチューム: $F=10.64, df=3/324, p<.01$ ; メンバーの作業ぶり: $F=2.35, df=3/323,$

表IV-3 班活動に対する満足度

項 目	フェローのリーダーシップ類型				分散分析結果
	PM	P	M	pm	
準備期間の班活動	2.89	2.65	2.83	2.68	F= 5.06** PM>pm・P
	(.32)	(.56)	(.41)	(.50)	
	81	52	77	120	
班のコスチューム	2.80	2.73	2.83	2.45	F=10.64** M・PM・P>pm
	(.46)	(.49)	(.41)	(.66)	
	81	51	76	120	
班メンバーの作業ぶり	2.81	2.63	2.84	2.72	F= 2.35 <sup>+</sup>
	(.45)	(.56)	(.40)	(.54)	
	81	51	75	120	
班活動全体	2.93	2.84	2.88	2.72	F= 4.79** PM・M>pm
	(.26)	(.37)	(.37)	(.52)	
	81	51	75	120	
満足度合計	11.43	10.84	11.39	10.58	F=10.22** PM・M>P・pm
	(.92)	(1.30)	(1.11)	(1.49)	
	81	51	75	120	

<sup>+</sup> p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01

上段：平均値，中段：SD，下段：人数

p<.10; 班活動全体：F=4.79, df=3/323, p=<.01)。班活動満足度の合計得点についてもリーダーシップの効果が有意であり (F=10.22, df=3/323, p<.01), 多重比較では PM 型と M 型の得点が P 型や pm 型に比べて有意に高く評定されている。

また班のモラルに関する7項目(表IV-4)では、「班の雰囲気に取り残されたと感じたことがあるか」で有意差がみられず、「今後も班の仲間とつき合っていきたいか」で傾向差 (F=2.20, df=3/326, p<.10) がみられたほか、残りの5項目ではすべてリーダーシップの効果が有意であった(楽しい雰囲気だったか：F=4.90, df=3/326, p<.01; 班がよそで悪く言われると腹が立つか：F=3.82, df=3/326, p<.05; 他の班をうらやましく思ったことがあるか：F=3.77, df=3/325, p<.05; フェローには今後も相談相手になってもらいたいか：F=6.97, df=3/326, p<.01; 班員の中に好きになれない人がいたか：F=6.50, df=3/326, p<.01)。さらに7項目の合計点をモラル得点として分析したところ、リーダーシップの効果が有意であり (F=8.91, df=3/325, p<.01), PM 型リーダーのもとで他の3類型に比べて有意に高いモラルが示されている。

## 考 察

### I. オリキャン参加者と不参加者の特性について

オリキャン実施前の参加者-不参加者の比較の結果、第1志望入学者が参加者群に多く、不本意入学者は不参加者群に多いことが示された。また、参加者群では「学部・学科の魅力」を受験理由とする者の割合が相対的に高い。さらに大学に対するイメージに関して、参加者が不参加者に比べて全体的にポジティブな評価をしている。これらの結果をまとめると、オリキャン参加者には不参加者に比べ、入学目的が学習指向と結び付いている者が多く、学生生活によ

表IV-4 モラル項目に関する結果

項 目	フェローのリーダーシップ類型				分散分析結果
	PM	P	M	pm	
1. あなたの班は楽しい雰囲気 でしたか	4.79 (.41) 81	4.50 (.58) 52	4.77 (.46) 77	4.52 (.83) 120	F= 4.90** PM>pm・P M>pm
2. あなたの班がよそで悪い われると腹が立ちますか	4.49 (.84) 81	4.12 (1.13) 52	4.10 (1.01) 77	3.97 (1.23) 120	F= 3.82* PM>pm
3. 班の雰囲気に取り残された と感じたことがありますか*	4.14 (1.13) 81	3.92 (1.19) 52	3.90 (1.27) 77	3.89 (1.09) 120	n. s.
4. 他の班をうらやましく思っ たことがありますか*	4.10 (1.14) 81	3.56 (1.11) 52	3.91 (1.22) 77	3.58 (1.30) 119	F= 3.77* PM>pm
5. 今後も班の仲間とつき合っ て行きたいと思えますか	4.80 (.43) 81	4.65 (.62) 52	4.78 (.48) 77	4.62 (.68) 120	F= 2.20 <sup>+</sup>
6. フェローには今後も相談相 手になってもらいたいですか	4.73 (.55) 81	4.46 (.75) 52	4.65 (.68) 77	4.25 (1.01) 120	F= 6.97** PM・M>pm
7. 班員の中に好きになれない 人がいましたか*	4.65 (.65) 81	4.21 (1.00) 52	4.00 (1.12) 77	4.05 (1.25) 120	F= 6.50** PM>P・M・pm
モラル項目合計	31.70 (3.20) 81	29.42 (4.16) 52	30.10 (3.24) 77	28.87 (4.46) 119	F= 8.91** PM>P・M・pm

上段：平均値，中段：SD，下段：人数

高得点ほどポジティブな反応

(\*) のついた項目は反転項目

<sup>+</sup> p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01

りポジティブな期待を抱いて臨んでいると考えられる。

オリキャン実施前に、既にこうした差異が生じていることから、オリキャンに参加するか否かの決定そのものに、被調査者の持つ先有傾向が影響していることが推測される。数量化Ⅱ類の分析結果から、第1志望で入学し大学内の友人仲間との関係づくりに積極的な者がオリキャンに参加する傾向を示すこと、反対に不本意入学であったり、サークル活動等への参加に消極的な者、またサークルに加入していても交流を趣味・興味の合うサークル仲間だけに限定して、それ以外の広大生仲間と準拠集団を求めない先有傾向を持つ者が、オリキャンに参加しない傾向があることが示唆された。また、オリキャン不参加理由で最も選択率の高い項目は「申し込みが遅れたから」であったが、オリキャンの実施要項と参加申し込み書が合格通知に同封されて送られること、また申し込みは先着順であり、定員に達し次第締め切られることを考慮すると、参加者と不参加者では、学生生活を積極的に楽しもうとする意欲と、そうした機会に対する関心の程度においても異なると考えられる。

## II. オリキャンの効果の吟味

### (1) 学生生活への適応度と満足度

学生生活への適応度と満足度に関する結果から、オリキャン参加と志望順位の比較に限定すれば仮説1-1および1-2はほぼ支持されたといえる。しかしながら、オリキャン前後の比較では入学直後の調査①に比べて、ほぼ夏休み前の授業が終了しようという時点(調査③)での大学生生活適応度得点と満足度得点が全般的に低下する傾向が示された。岩崎・石桁(1986)の研究では、4月～5月、5月～6月の各分類区間でほとんどの新入生がやる気の低下傾向を示すことを明らかにしているが、岩崎らの報告は適応度と満足度に関する本研究の結果を支持している。もっともこの低下傾向は、適応度得点の11～22点、満足度得点の3～21点という得点範囲を考慮すればいわゆる五月病といわれるような不適応症状を示すものではないであろう。また、適応度に関する質問項目に関して調査①と調査③ではいくぶん記述が異なり、調査③では「講義への出席率はよい方だ」「心のふれあう学友にめぐまれている」等の項目は現状を問う様式のものであったのに対し、調査①では入学直後という状況を配慮して「講義には欠かさず出席するつもりである」「心のふれあう学友にめぐまれそうだ」のように今後の希望あるいは期待を尋ねる様式で提示された。したがって、入学当初の高揚感、期待感によって適応度得点が全般的に引き上げられた可能性もある。満足度得点についても同様に入学時の達成感や期待感の影響を考慮しなければならない。

ところで、オリキャンへの参加が新入生の適応度や満足度の維持に及ぼす効果は、とりわけ第1志望の入学者に顕著である。彼らはそれ以外の学生に比べて高い適応度得点を維持している。また、満足度についていえば、第1志望入学者は、調査①の段階で高い満足度得点を示しているが、オリキャンに参加しなかった場合には、3ヶ月のうちに満足度得点がかかなり大きく低下する傾向が示された。これらの分析による知見から、さらに大学適応に及ぼす不本意入学のネガティブな影響が示唆される。つまり、第1志望で期待の高い入学者にはオリエンテーション・キャンプという集団活動の経験が有効であるが、第2志望以下の不本意入学者の適応に関しては、あまり有効とはいえないことが示唆される。

### (2) 新入生の友人数と孤独感について

調査③の結果から、オリキャン不参加者に友人の少ない者が多いことが示された。しかしながら、友人数それだけからはオリキャン不参加者が不満足な友人関係の中にあるとは断言できない。彼らがもともと、少数の親しい友人との緊密な交友関係を好む傾向を持っているとも考えられる。ところが、孤独感に関する結果では得点は全般に低いものの、不参加者が参加者に比べ高い孤独感を報告しており、オリキャン不参加者が現在の友人関係に決して満足しているわけではないことが示唆される。友人数、孤独感に関して仮説2は支持されたといえるであろう。

獲得友人数および孤独感に関する結果については、オリキャンへの参加の効果が顕著であるといえる。すなわち、第1志望入学、不本意入学に関わらず、オリキャンへの参加は、新しい友人獲得の機会の提供、またその帰結としての孤独感の低減に関して積極的な効果を示しているといえよう。この点をさらに明確にするために、獲得友人数及び孤独感についても入学直後の時点における初期値を測定し、オリキャン前後での変化を検討することが必要であろう。

ところで、準拠集団の変化に関する結果から、オリキャン参加・不参加に関わらず、新入生は入学後3ヶ月の間に準拠集団を入学以前からつながりのある集団から、しだいに大学の内部に見いだすようになり、対人関係に関して学生生活への適応を果たしつつあるようにみえる。なかでもオリキャン参加者は、学生生活初期の適応期においてオリキャン時の仲間を有してい

ることによって、不参加者に比べさほどの孤独感を味わうこともなく、学生生活へのよりスムーズな適応を果たしているのではなかろうか。

### (3) 儀式としてのオリキャン

学生にとっては、学生生活に関する情報を得ることよりも集団の連帯と親睦を図ることがオリキャンの主たる目的であり、またその点で成果をあげているようにみえる。すなわち、コスチュームの作成・着用や班単位の活動によって班の凝集性を高める一方で、キャンプ・ファイヤーの場では「ティク・サク・コール」や「ハイズカ踊り」などの集団遊戯によって相互連帯感・一体感を高揚している。

このように単独では恥ずかしくて着られない衣装を着用することや、端目には奇異に見える行為を共有することで、参加者は広大生の一員として互いを承認しあうのであろう。言い換えれば、オリキャンは“大学ムラ”への入村儀式的役割を担っているといえる。また参加した新入生の立場からすれば、入学初期の不安な一時期にこうした行事に共に参加することで情緒的な結びつきを体験し、学内に新たな友人関係のネットワークを創り出そうとしていると考えられる。オリキャン不参加者もオリキャンが友人や先輩・教官とのネットワーク形成をもたらすという認識では一致しており、そのネットワーク作りに出遅れたことが最大のデメリットと考えていることが示唆される。

こうした社会的ネットワーク形成と関連づけて学生生活の情報源、あるいは学部・学科に関する知識の調査結果を吟味すると、6月下旬現在では、大学生活に関する知識にあまり差がみられないが、調査時以降、先輩の知人を多く持つオリキャン参加者の方が、不参加者に比べて学生生活に役立つ情報やアドバイスを受ける機会に恵まれるであろうことが推測される。また、学部帰属意識に関する評価の結果から、オリキャン参加者はオリキャン時の班の仲間を中心に、同学部新入生同士の連帯も強くしているといえよう。したがって、友人からの援助や情報提供の機会も不参加者に比べて増えるのではないかと考えられる。

## Ⅲ. フェローのリーダーシップとオリキャンの効果

オリキャン参加新入生の評定に基づいて分類された、フェローのリーダーシップ類型では、PM型フェローのもとで他の3類型に比べて、班活動の評価が高く、班内のモラルも高くなることが示された。したがって仮説3はほぼ支持されたといえる。各調査でのリーダーシップP得点とM得点はそれぞれ正の相関を示していたが、特に調査②と③の間の相関が両得点とも高く、オリキャン期間中のフェローの行動に対する評価はオリキャン後も比較的安定していることが示された。また、調査①と②、調査①と③では相対的に相関が低いことから、はじめは曖昧な印象で評定されていたフェローのリーダーシップの認知が、オリキャン期間中のフェローの行動観察に基づいて修正・決定されていった過程が伺える。

オリキャンのように非常に短命な集団の“お祭り”色の強い活動過程においても、コスチューム制作、テント設営、飯合炊爨、ミニ・ファイヤーなどの班活動を通じてフェローがリーダーシップを発揮する機会が多い。物質的生産性というよりも連帯と親睦を主目的とするこのような集団にあって、PM型のリーダーシップは凝集性の高い集団の形成の一翼を担っているといえよう。

ところで、フェローを対象とした調査の結果から、フェローの仕事は時間的にも経済的にも大きな負担を背負うことになることが示されたが、一方でフェローたちは自分が参加した前年度のオリキャンに対してポジティブなイメージを保持しつつ、「今度は自分たちの手で」という情熱を持ってオリキャンに臨み、そしてその仕事に充実感を覚えていることが伺える。こう

した調査結果を裏付けるように、訓練期間を振り返って、自由記述欄にフェローの1人が次のように述懐している。「……みんなが春休みにお金を貯めている間に、自分はお金にかえられない経験をしているのだと何度も思いました……」。

オリエンテーション・キャンプは、在学生のリーダーシップ・トレーニングという側面においても大きな役割を果たしているようである。

#### IV. 今後に向けて

本研究で示されたように、入学初期に比べ夏休み前の6月下旬では、大学新入生の適応度・満足度は、全般に低下する傾向がある。こうした現象は、学生生活に対する期待と意欲の低下に伴うものであることが示唆される。オリエンテーション・キャンプが、入学初期の高い満足度と適応（期待）度を維持する上で積極的な効果を示さなかったことから、大学適応の援助という目的に照らすと、全学行事として実施する意義とコストにみあう成果を得られたとは言い難い。しかしながら、新しい友人の獲得、また、そこでの友人関係・先輩・教官との交流を契機とする学内での対人関係のネットワークづくりに関しては、学生・教職員ともオリキャンの成果として高く評価している。

ところで、この対人関係のネットワークづくりに関連して、新たな問題が提起される。すなわち、第1志望で入学し、友人獲得や獲得した友人との交流に積極的な学生がオリキャン参加に関しても積極的であるのに対し、本来、適応のための援助を必要とする学生が多く含まれるであろう不本意入学者や、対人関係への消極性を示す学生がオリキャンに参加しない傾向が示されたことである。つまり、オリキャンに積極的に参加しようとする学生のほとんどは、そうした公式の機会がなくてもネットワークを開拓していく能力をもっており、一方、オリキャン不参加者の中には、その消極性のゆえに参加を躊躇し、結果、交際範囲を広げることができず、ますます孤独な状況に陥ってしまう者がいる、という皮肉な悪循環を招いている可能性がある。

したがって、適応支援の努力はむしろオリキャンのようなオリエンテーション活動に参加しない学生に向けられるべきであって、新入生全員を参加させるものとしなければ、その本来の機能は果たし得ないであろう。そのためのコスト、収容施設の面からみて全員参加が不可能ならば、学部や企画によって分割したり、オリエンテーション・ウィークなどと銘打って長期間開催し、その期間中、新入生が自主的にプログラムを選択し参加できる形式とするなどの対応策が考えられるであろう。同時に、新入生の実状に適合する的確な情報や援助を提供できるプログラムづくりが今後必要とされる。

## 要 約

本研究は、オリエンテーション・キャンプ（オリキャン）と呼ばれる新入生の大学適応を援助する集団活動が大学新入生の大学適応に及ぼす効果を検討するために行われた。広島大学の'91年度新入学生のうち総合科学部・経済学部・工学部Ⅳ類のキャンプ参加者267名、不参加者148名を調査対象として、オリキャンの前後でオリキャン参加（参加・不参加）×大学志望順位（第1志望・その他）の各群の学生生活への適応、満足度を比較した。また、オリキャン後の友人数、孤独感についても検討した。結果として適応度、満足度ともオリキャン前の4月下旬に比べ、オリキャン後の6月下旬に得点が低下する傾向がみられたが、適応度では第1志望入学者でオリキャン参加者がオリキャン前後で相対的に高い得点を維持していた。また満足度では第1志望入学者でオリキャンに参加しなかった学生の得点がオリキャン後に急激に低下



する傾向が示された。これらの知見からオリキャンは第1志望入学者の適応援助には有効であるが、不本意入学者の適応については効果があるとはいえないことが示唆された。また参加者に比べ不参加者では、6月下旬段階で友人数が少なく、有意に高い孤独感を示していたことから、新入生の友人獲得と連帯感の形成についてオリキャンの効果が検討された。

(謝 辞)

本研究を進めるにあたって、参加観察に協力して下さった総合科学部C-1班のフェローの上小城敬幸君はじめ学生の皆さんに深甚なる謝意を表します。

## 文 献

- 浅尾豊信 1990 新入生オリエンテーションの現状とそのあり方 IDE・現代の高等教育 312, 33-36.  
岩崎重剛・石桁正士 1986 入学初年度の学生のやる気 一般教育学会誌 8, No. 2, 91-101.  
加澤恒雄 1986 大学教育における“SPS”の重要性について —特にフレッシュマン・オリエンテーションに関する一考察— 一般教育学会誌 8, No. 2, 102-109.  
工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(I) —孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討— 実験社会心理学研究 22, No. 2, 99-108.  
黒川正流・上里一郎・岩村 聡 1976 広島大学学生の宿所と生活 大学研究ノート 24.  
黒川正流 1980 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究(Ⅲ) 大学研究ノート 44.  
黒川正流 1987 教師のリーダーシップ(B) 三隅二不二監修 現代社会心理学 有斐閣 pp. 449-461.  
中村弘道 1985 新入学生に対するオリエンテーションについて 大学と学生 227, 4-6.  
中村 完・新里里春・鳥袋恒男・井村 修 1987 大学生の適応に関する心理学的研究 —琉球大学の新生を対象として— 琉球大学社会学紀要 29, 119-190.  
瀬川道治 1981 広島大学におけるオリエンテーション —特にオリ・キャンの事例報告— 厚生補導 177, 16-20.  
上地安昭・中丸澄子・小柳晴生 1982 大学生の適応実態の大学間比較研究 PHOENIX-HEALTH 広島大学保健管理センター年報 No. 19, , 89-101.  
山口正二・岩野武志・原野広太郎 1990 大学生の「精神健康度テスト」作成の試み —妥当性の検討を中心として— 学生相談研究 11, No. 2, 11-18.